

§1 導入：「あなたは相対主義者ですか」と問う理由：

§2 相対主義とは何か？

- (1) プロタゴラスの相対主義「人間は万物の尺度である」
- (2) 入不二基義の定義
- (3) グローバル相対主義「すべての真理はただ相対的に真であるにすぎない」
- (4) ローカル相対主義「相対主義の主張自体は、絶対的に真である」

<補足説明>

①ローカルな相対主義を

「ローカルな相対主義自体は、絶対的に真である」

と定義することは、定義の循環になる。そこで次のように定義しなおしたい。

「(この主張の真理性を除く)すべての真理は、ただ相対的に真であるに過ぎない」

②ローカル相対主義は、究極的に根拠づけられた知(絶対的な知)を主張しており、「ミュンヒハウゼンのトリレンマ」の論証と矛盾するよう見える。これを防ぐには、次の④のように考えなければならない。

③相対主義について言えることは、可謬主義についても同様に言えるだろう。つまり、グローバルな可謬主義「すべての知は可謬的である」は、「…」「[[「すべての知は可謬的である」は可謬的である]は可謬的である]は可謬的である」…」と無限に反復して閉じないので、成立しない。それゆえに、次のローカルな可謬主義は

「(この知を除く)すべての知は、可謬的である」

が成立する。これもまた、「ミュンヒハウゼンのトリレンマ」の論証と矛盾する。これを敷設にも④のように考えなければならない。

④知の存在の語用論的論証。

「知は存在するのか」

「いいえ、知は存在しません」

これは、語用論的矛盾である。

「絶対的な知は存在するのか」

「いいえ、絶対的な知は存在しませんし、これも絶対的知ではなく、これも…」

これは、語用論的矛盾である。

しかし、これから、「はい、知は存在します」「はい、絶対的知は存在します」を導出するには、古典論理(ないし二値原理)を採用する必要がある。古典論理は絶対的に正当化されているのではない。ゆえに、肯定の答えを主張することはできない。

このように考えるとき、①のローカルな相対主義の定義も、ローカルな可謬主義の定義も、「ミュンヒハウゼンのトリレンマ」の論証との矛盾を免れている。

§ 3 クーンのパラダイム論あるいは概念枠相対主義

§ 4 Davidson による概念枠相対主義への批判 (本日はこの続き)

前回の一部の再説明

B 異なる概念枠の存在の主張への批判 (再度説明)

異なる概念枠があるといえるのは、「翻訳の完全な失敗」と「部分的な失敗」の二つのケースであるので、それぞれについて検討をおこなう。

(厳密に言えば、翻訳可能性については、「非対称性の可能性があるが、それは無視する」195と限定されている。つまり、言語 x から言語 y には翻訳できるが、逆はできないというようなケースは、ここでは無視するということである。)

1、翻訳の完全な失敗 というケースは存在しない 195

<論証1：翻訳の推移性に関連する論証：再説>

翻訳の推移性を認めることは次を認めることである。

L1 と L2 は相互に翻訳可能である。

L2 と L3 は相互に翻訳可能である。

しかし、L1 と L3 は相互に翻訳不可能である。

<翻訳可能性=概念枠の同一性>を認めると次のようになる。

L1 と L2 の概念枠は同一である。

L2 と L3 の概念枠は同一である。

しかし、L1 と L3 の概念枠は非同一である。

この論証に対してデイヴィドソンは、つぎのようにいう。

「この頭の体操が、議論に何か新しい要素を付け加えるとは思えない。というのは、土星人のやっていることが冥王星語の翻訳であると我々がどのようにして認知するか、を問わねばならないだろうからである。自分のやっていることは翻訳である、と土星人の話し手が我々に語るかもしれない、あるいはむしろ、そう彼が語っているとわれわれが一時的に仮定するかもしれない。だが、その場合でも、我々の土星語の翻訳が適切かどうか疑問になりうるのである。」

(邦訳 197)

L1 と L3 は翻訳不可能であるので、L1 の話者は L2 と L3 が翻訳可能であるかどうかを確認できない。したがって、もし翻訳が非推移的であるとすると、私たちは翻訳の非推移性を確認できない。したがって、翻訳の非推移性を用いて、二つの言語の概念枠が異なることを確認できない。

<論証2 経験と一定の関係に立つが翻訳できないものは、見つからない>

(この論証については、今はスキップします)

2、部分的な翻訳不可能というケースも存在しない

「クワインに従って私は、根源的解釈の理論のための基本的証拠として、文に対するある種のきわめて一般的な態度を、循環や不当な想定無しに受け入れることができる、と提案したい。」 209

〈われわれは、ある発話が、主張の発話であるとか、疑問文であるとか、推測であるとか、の区別を正しく理解できる〉ということクワインとデイヴィドソンは、事実として承認する。(これは、実に都合のよい恣意的な前提であるように思われる。)

「ある文をだれかが真とみなしていると知るだけでは、彼がこの文で何を意味しているのかも、また彼がそれを真と見なすことでどんな信念が表されているのかも知られない。それゆえ、文を真と見なすということは、二つの力のベクトルなのである。つまり、解釈の問題は、有効な意味の理論と受容可能な信念の理論とを証拠から抽出することにほかならない。」 209

* 解釈の事例

「ケッチが帆走するのが見えたとき、仲間が「見ろ、すてきなヨールだ」といったとすると、われわれは解釈の問題に直面することになる。」 邦訳 209

このとき、私たちは、その仲間が「ヨール」という語の意味を、違った仕方で理解しているのか、それともその仲間がその船を違った仕方で知覚しているのか、どちらなのかを判定できない。

* 枠組の相違と意見の相違

言語の共有 (ないし相違) と意見の共有 (ないし相違)

「枠組みであれ、意見であれ、それらの相違に関する申し立ての明晰さと鋭さは、共有された (翻訳可能な) 言語か、あるいは共有された意見か、いずれかの基盤を拡大することで増進するのである。実際、どちらにするか、はっきりした境界線をひくことはできない。」 211

「一致を最適化するようにして解釈を行う (このことは、すでに述べたように、説明可能な誤り、すなわち意見の相違の余地を含んでいる) とき、われわれは他者の言葉や思想に最大限の意味を与えることになる。このことのどこに、概念相対主義のための言い分がのこっているのか。」 211

概念枠 (ないし言語) の共有 (ないし相違) と意見の共有 (ないし相違)

「私の考えでは答えはこうなる。信念の相違に関して言えることとほぼ同じことを、概念枠の相違に

関してもいわなければならない。つまり、枠組みであれ、意見であれ、それらの相違に関する申し立ての明晰さと鋭さは、共有された（翻訳可能な）言語か、あるいは共有された意見か、いずれかの基盤を拡大することで増進するのである。実際、どちらにするか、はっきりした境界線をひくことはできない。」 211

「話し手によって斥けられた異質な文を、共同体を通じてわれわれがつよく結び付けられている文に翻訳することを選べば、われわれはこれを枠組みの相違と呼びたくなるかもしれない。一方、証拠を別のやり方で調整しようとする場合には、意見の相違について語る方がいっそう自然かもしれない。しかし、他者がわれわれと異なったやり方で考えているとすると、いかなる一般的原理や証拠への訴えも、相違が概念ではなくむしろ信念にあると決定するようにわれわれに強いることは、できないのである。」 211

他者の発話を承認できないとき、この対立の原因として次の二つが考えられる。

言語（概念枠）の違い

意見の違い

このどちらにすべきかの、基準は存在しない。

つまり、意見の違いが、概念枠の違いに帰される場合にも、意見の違いに帰することが可能である。したがって、<言語（概念枠）の違いと意見の違いを区別できない>。したがって、<部分的な翻訳不可能性を明確に指摘することはできない>。

C 経験論の第三のドグマ（枠組と内容の二元論）への批判

*一つの枠組みがあるのでもない

「枠組みが異なることを理解可能な形でいい得ないとすれば、それらが同一であることもまた理解可能な形では言いえないからである。」 212

複数の枠組みが指示できないとき、私たちは、一つの枠組みを指示することもできない。

*枠組みと実在の二元論を放棄する

「枠組みと実在の二元論のドグマを仮定すれば、概念の相対性と枠組みに相対的な真理とが与えられる。このドグマを欠けば、この種の相対性も消え去る。もちろん文の真理は言語に相対的なままだが、しかしそれは可能な限り客観的である。枠組みと世界との二元論を放棄することで、世界を放棄するわけではない。なじみの対象たちとの直接的接触を再び確立するのであり、またそうした対象のおどけた仕種が、われわれの文や意見を真や偽にするのである(re-establish unmediated touch with the familiar objects whose antics make our sentences and opinions true or false)」 212

デイヴィドソンにとって、枠組みと実在の二元論を放棄することは、枠組みを放棄することである。
「枠組み相対主義」も放棄することになる。

■以上のデイヴィドソンの論証を、パラダイム論に適用してみよう。

・パラダイムの共約不可能性の理由

対抗関係にあるパラダイムが共約不可能である理由を、ドゥペルトは次の4点にまとめていた。

- ①同じ科学言語で語られていないこと、
- ②同じ観察データが提出されたり、承認されたりあるいは知覚されたりしないこと、
- ③同じ問いに答えたり、同じ問題を解いたりすることに関心がないこと、
- ④十全な説明あるいは正当な説明とさえみなされるものが同じ仕方で解釈されないこと

・考察1：観察の理論負荷性の議論では、②は①から帰結する。従って、言語の相違は、知覚や知覚報告の相違をもたらす。従って、概念枠組みの相違は、知覚報告の相違をもたらす。この議論が正しければ、言語の相違を拡大して、意見の相違（知覚報告の相違）を縮小することはできない。

・考察2：デイヴィドソンは、＜概念枠組みが異なるとき問いが異なる＞、という論点を検討していなかった。